

Oh, 能

井上 道義

渡邊荀之助さんには、昨年《大魔神》という新作のお能の試演を金沢で実施した時に深くお付き合いをしました。武満徹、伊福部昭、モーツァルトらの音楽を背景に、渡邊氏演ずる故岩城宏之音楽監督が大魔神（！）になって降臨し、ワキ役の現アンサンブル金沢監督の井上を打ちすえる、という話を文字通り二人で作ったのです。また金沢では、観世鍬之丞さんがポーランド大使ルドビカさんと共作した新作能《調律師》——ピアノの調律師とシヨパンの霊がシテ、画家で唯一のシヨパンの肖像を残した友人ドラクロワがワキとなり、シヨパンの「ノクターン」を背景に使った大変示唆に富んだ作品を上演しました。

若い頃、よく分からないけど大したものだと周囲が言うので興味を持ち続けて見に行っていたお能は、僕にとつて今随分と近い所に存在しています。ただ、お能側に近づくのではなく、無理やりこちら側に近づけるという方法ではありませんが……。シヨパン・マニアには嫌がられ、多分ですがお能マニアには普通の音楽を使うなんて意味がない、と思う方もいらっしゃると思います。

出し手側の能力の問題なのです。受け手に必要なのは敷居を低くすることではなく、入口を開ける「鍵を手渡されること」と「だと僕は信じてやってきました。自分が逆の立場になつて考えればいつもそうなのです。」

その「判る」というのは、能でいえば例えば装束のそれぞれの意味、舞の意味、囃子の出来不出来、その日の声の調子の好し悪し、特に最近はいろんな補助メディアの出来不出来……それこそ判ることが不可能なほど様々なことが纏いついています。そこまで突っ込める観客はあまりいませんし、そこにエネルギーを注げる人はそういません。

例えば、しょうもないテクノロジーやダンサーなどでも、見えてくれれば通用したり、何も出来なくても「良い人」ならば皆が許したり、特別デブだったりアンバランスだったり、珍しい外人だったらタレントと呼ばれたり……スポーツだってファッションだって、ルールも知らない、時代の美の支点も判らない人の中で、それぞれの世界の「アップ」として生きているのでしょうか。

そうなのです。物の価値基準の（支点、視点）となるものが多すぎて価値観が多岐に渡り、「自分で選ぶ」ことに本当に異常なエネルギーが必要な時代です。僕は去年、北朝鮮の平壤に呼ばれて国立交響楽団を指揮しましたが、かの地では選ぶ必要がないほど物が少ないことに芯からほつとした位です。幸福は自由度とつり合うものなのでしょうか？ 静かな独房に幸福はないのでしょうか？ スーパーマーケットやインターネット・ショッピングに幸福が隠れてい

この態度は自分の生業である指揮についても同じことが言えます。誰その弟子と言われることを誇りに思い、本家本元に近づき、自家薬籠中のものにする指揮者は大勢います。そういう方法以外に東洋人が歩む道はないのでしょうか？ 今活躍している歌舞伎役者のみならず、お能や狂言の、いやいやこの国の華道、書道、等々家元制度の下に生まれた多くの人たちも、実はその中で一旦は反発したり避けたり無視したりした末に、あるとき何かを発見し、それぞれの芸の中に新しく道を見いだした人がほとんどではないでしょうか？ 素直に「誰それ」を継ぐなんて本気でしようか？ これは会社を継ぐ、家業を継ぐという場面でも同じだと思います。

お能のみならず、全ての芸術（アート）にとつて観客とは、世界中どこでも大体八〇%が素人です。物によつては九九%が素人で、通じない言葉で相手に語りかけるような世界です。最近聞かれなくなった言葉に「私はクラシックが判らないので」があります。これは実は単に演奏する側に問題があつて、つまらなかつた経験が重なつただけです。

るのでしようか？ そもそも幸福度などは測れるものでしょうか？ 自分の主観を信じられるようになるのは一握りの人間ではないでしょうか？

話が随分飛躍してしまいました。

お能は時空を飛び越えますし、一瞬の中に一生を凝縮しようとしています（もちろん全ての真の芸術がそうですが）。しかしジャズのセッションの様に、あまり合同練習に時間を割かない能の上演方法は、何らかの方法で繰り返し上演に耐える方向を模索するべきだし（これはオーケストラ音楽にも同様な課題です）、今こそ九九%の素人のお客にも受け入れられる「今を主題にしたお能の手法によるドラマ」を果敢に創作する時と感じます。法外にコストのかかつた伝統的な装束から衣装へと「革命」もあるべきとも思いますが。

底の浅い内容と、生の音からどんどん離れていっている出来損ないのミュージカル（素晴らしい演目もあります）や、耳もつんざく音量でありながら何を歌っているかわからないロック・コンサート（もちろん良いものもあります）の泥沼に大多数の人々が騙されていることに気づくのだって、もうすぐ先にあるのですから。その「革命」は日本という枠さえ取り払って進めるべきでしょう。防波堤は役に立たないのです。

（いのうえ みちよし）

指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督

第345号

国立能楽堂

シリーズ
能を再発見するⅠ
—— 老体で見る高砂 ——

平成二十四年
五月

